

第40回名古屋春栄会演能会

演目の紹介

平成22年8月1日(日)

名古屋春栄会

目 次

舞囃子	初雪（はつゆき）	1
	是界（ぜがい）	1
仕舞	海人（あま）	3
	錦木（にしきぎ）	4
	羽衣（はごろも）	5
	枕ノ段（まくらのだん）〔葵上（あおいのうえ）〕	6
独吟	弱法師（よろぼおし）	7
	敦盛（あつもり）	8
仕舞	鶴亀（つるかめ）	9
	田村（たむら）	10
	誓願寺（せいがんじ）	11
	絃上（けんじょう）	12
	猩々（しょうじょう）	13
舞囃子	弓八幡（ゆみやわた）	14
	鶴亀（つるかめ）	15
仕舞	箬（えびら）	16
	羽衣（はごろも）	17
	柏崎（かしわざき）	18
	熊坂（くまさか）	19
独吟	弱法師（よろぼおし）	21
	玉ノ段（たまのだん）〔海人（あま）〕	22

仕舞	養老（ようろう）	24
	女郎花（おみなめし）	25
	東北（とうぼく）	26
	鶺鴒（うかい）	27
舞囃子	高砂（たかさご）	28
	経政（つねまさ）	29
仕舞	舟弁慶（ふなべんけい）	30
	野守（のもり）	31
	遊行柳（ゆぎょうやなぎ）	32
	高砂（たかさご）	33
独吟	箴（えびら）	34
	弱法師（よろぼおし）	35
仕舞	杜若（かきつばた）	36
	鉄輪（かなわ）	37
	鶺鴒ノ段（うのだん）〔鶺鴒（うかい）〕	38
	藤戸（ふじと）	39
能	乱（みだれ）〔猩々（しょうじょう）〕	40
舞囃子	融（とおる）	42
能のミニ知識		43

このリーフレットは、第40回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
 演目は、番組順に並んでいます。
 詞章については、金春流の謡本から転載しました。

初雪（はつゆき）

【分類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊中ノ舞

【作者】金春禅鳳

【主人公】前シテ：姫君（面・小面）、後シテ：鶏の霊（面・増女）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

ある姫君が白い鶏を飼っていましたが、雪のように白いので「初雪」と名づけ、かわいがっていましたが、ある日死んでしまいました。姫君はひどく悲しみ、近所の上臈を集めて、供養をしました。すると、その初雪が空に現れ、串いによって、極楽に行くことができ、楽しみつきない身になることができたと、しばらく懐かしそうに飛び回っていましたが、やがてどこかへ飛んで行ってしまいました。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

げにありがたき．とむらいの。げにありがたきとむらいの。心もすめる折からに。鳧鐘をならし声ごえに。南無阿弥陀仏弥陀如来。あれあれ見よやふしぎやな。あれあれ見よやふしぎやな。中空の雲かと見えつるが。雲にはあらで。さも白妙の。初雪の。つばさを垂れて。飛びきたり。姫君にむかい。さもなつかしげに立ち舞うすがた。げにあわれなる。けしきかな。

<中ノ舞>

この念仏の功力にひかれ。この念仏の功力にひかれて。たちまち極楽の台にいたり。八功德池の汀に遊び。鳧雁鴛鴦につばさをならべ。七重宝樹の梢にかけり。楽しみさらに。つきせぬ身なりと。いうつけ鳥の。羽風をたてて。しばしがほどは飛びめぐり。暫しがほどは飛びめぐりて。ゆくえも知らずなりにけり。

是界（ぜがい）

【分類】五番目物（切能＝天狗能） ＊イロエ／舞働

【作者】竹田法印宗盛

【主人公】前シテ：是界坊（直面）、後シテ：是界坊（面・大癒見）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

中国の天狗の首領である是界坊は、中国において高慢の僧を残らず天狗道に誘い入れたので、次は、日本の仏法を妨げようと日本にやって来ます。そして、日本に渡ってくると、まず愛宕山の天狗の太郎坊を訪ね、相談し、比叡山を襲うことにします。語り合ううちに不動明王の威力が恐ろしく弱気になりますが、やがて決心して太郎坊の案内で比叡山に向います。

<中入>

比叡山の僧が勅命を受け、参内しようと下山すると、にわかに嵐が起こり天地が震動して、是界坊が天狗本来の姿で現れます。そして、僧を魔道に誘い入れようとするので、僧は悪魔降伏のため不動明王を念ずると、不動明王は矜羯羅童子と制多迦童子を従えて、十二天とともに現れます。また、日吉、石清水、松尾、北野、賀茂の神社の神々も現れて、是界坊に襲いかかります。是界坊も負けじと奮闘しますが、仏力・神力に翻弄され、さすがの是界坊も力を失って、もう決して日本には来ないと言って、中国に退散します。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

そもそもこれは。大唐の天狗の首領。是界坊とは。わが事なり。いかに御坊。いましも何の観念をかなせる。それ若作障碍。即有一佛。魔境と説けり。あら痛わしや。欲界の内に生まるる輩は。悟りの道やそのままに。魔道のちまたとなりぬらん。ふしぎや雲のうちよりも。ふしぎや雲の内よりも。邪法を唱うる声すなり。もとより魔佛一如にして。凡聖不二なり。自性清浄。天然動きなき。これを不動と。名づけたり。

<イロエ>

聴我説者得大智恵。咩多羅他漢滿。その時御声の下よりも。その時み声の下よりも。明王あらわれ出で給えば。矜迦羅制多伽十二天。各々降魔の力を合わせて。御先を拂って。おわします。

<舞働>

明王諸天は。さておきぬ。明王諸天は。さておきぬ。東風ふく風に。東をみれば。山王権現。南に男山西に松の尾北野や加茂の。神風松風ふきはらえば。さしもに飛行のつばさも地に落ち。力もつき弓のやしまの浪の。たちさると見えしが又とび来たり。さるにても。かほどに妙なる佛力神力。今よりのちは。来たるまじと。いう声ばかりは虚空にのこり。いう声ばかりは虚空にのこって。姿は雲にぞ。入りにける。

海人（あま）

【分類】初・五番目物（略脇能物＝女菩薩物） ＊早舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：海人（面・曲見）、後シテ：龍女（面・泥眼）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

房前大臣（藤原房前）は讃岐国（香川県）の志度の浦で亡くなったという母の追善のため、従者と供人を伴って、はるばる志度の浦までやって来ます。すると、一人の海人が現れます。従者が、海人に水底に映る月を見たいので、梅松布〔みるめ〕を刈るように命ずると、海人は昔も、宝の珠を海底から取り上げるためにもぐったことがあると言い、昔、唐土から興福寺に三種の宝が贈られたが、そのうち面向不背の珠だけが、この浦の沖で龍宮に取られてしまった。藤原淡海公（藤原不比等）はそのことを深く惜しまれ、身をやつしてこの浦に下り、海人乙女と契りを交わし、その玉を取り返してくれるように頼んだこと、海人が淡海公の子をもうけ、その子が今の房前大臣であることを語ります。これを聞いた房前大臣が、それは自分のことだと名乗ると、海人は、我が子を淡海公の後継ぎにする約束と交換に、千尋の綱を腰に結わえ、海に潜り、見事に珠を取り返すものの、龍神の激しい抵抗にあい、自分の乳の下を掻き切って、そこに珠を隠し、流れ出る血潮に龍神がたじろぐうちに、息も絶え絶えになりながら海人は帰ってきたものの、息を引き取りましたと語り、自分こそ、その海人の亡霊であると明かし、海中に姿を消します。

<中入>

房前大臣は、浦の者からも珠取りの次第を聞き、亡き母の残した手紙を読み、十三回忌の追善供養を営みます。読経のうちに、亡霊は龍女の姿で現れ、法華経の功德で成仏できたと喜び、舞を力強く、美しく舞います。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

今この経の徳用にて。今この経の徳用にて。天龍八部。人與非人。皆遙見皮。龍女成佛。さてこそ讃州志渡寺と号し。毎年八講。朝暮の勤行。佛法繁昌の靈地となるも。この孝養と。うけたまわる。

錦木（にしきぎ）

【分類】四番目物（執心男物） *男舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：男（直面）、後シテ：男の亡霊（面・怪士）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

諸国一見の僧が、従僧と共に陸奥国狭夫の里（青森県）にやって来ます。そこへ錦木を手にした里の男と細布を持った女が現れて、恋の思いを懐かしんで語ります。僧が二人の売り物を不審に思い、その謂れを尋ねると、二人は名物についての歌物語を語ります。さらに僧が詳しい話を所望すると、男が、この地方には、恋した女の家の門に錦木を立て、女がその錦木を家に取り入れれば、男の思いがかなったしるしという風習があるが、3年間錦木を立てるために女の家に通ったものの、思いを遂げることなく死んだ男の塚があり、それが錦塚と呼ばれていると話します。そして、二人で僧をその塚に案内し、塚の中に消えてしまいます。

<中入>

僧は里の者に錦塚の謂れを聞き、塚の前で仏事を始めます。すると、女の亡霊が現れて、僧の読経を感謝します。続いて、男の亡霊も塚の中から感謝の言葉を述べ、僧の前に姿を現します。塚の中で昔が再現され、男の亡霊は、機を織る女に3年間錦木を立て続けた恋の苦悩を物語ります。女の亡霊が、今度は男の求婚を受け入れます。男の亡霊は喜びの舞を舞います。朝になると、野中に塚があるだけでした。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

舞を舞い。舞を舞い。歌をうとうも妹背のなかだち。立つるは錦木。織るは。細布の。とりどりさまさまの夜遊の盃に。映りて有明の影。恥ずかしや恥ずかしや。あさまにやなりなん。覚めぬさきこそ夢人なるもの。覚めなば錦木も細布も。夢も破れて松風さっさったるあしたのはら。野中の塚とぞ。なりにける。

羽衣（はごろも）

【分類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [クセ] の部分…下線部）

駿河国(静岡県)三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようと思おうと返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は仕方なく承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞 [クセ] の部分の抜粋）

春霞。たなびきにけり久かたの。月の桂も花や咲く。げに花かずら。色めくは春のしるしかや。面白や天ならで。ここも妙なり天つ風。雲の通路吹きとじよ。乙女の姿。しばし留りて。この松原の。春の色を三保が崎。月清見瀉富士の雪。いづれや春のあけぼの。たぐい波も松風も。のどかなる浦の有様。その上天地は。何を隔てん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。君が代は。天の羽衣まれに来て。なずともつきぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。声そえて数々の。笙笛琴箏篳篥。孤雲のほかにみちみちて。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。緑は波に浮島が。拂う嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ。妙なる。

葵上（あおいのうえ）

【分類】四・五番目物（怨霊物）

【作者】世阿弥（古能を改作）

【主人公】前シテ：六条御息所の生霊（面・泥眼）、
後シテ：六条御息所の怨霊（面・般若）

【あらすじ】（『枕ノ段』の部分…下線部）

左大臣のご息女で、光源氏の正妻である葵上が物怪に悩まされ寝込んでいるので、貴僧や高僧を召して加持祈祷を行ったり、さまざまな治療を施してみるが、いっこうに効き目がなく回復しません。そこで朱雀院に仕える延臣が梓弓によって亡霊を呼び寄せると呪法の上手である照日ノ巫女に命じて、怨霊の正体を占わせます。すると梓の弓の音に引かれて、光源氏の愛人であった六条御息所の生霊が破れ車にのって現れます。そして、光源氏の愛を失った恨みを綿々と述べ、葵上の枕元に立って、責め苛み、幽界へ連れ去ろうとします。

<中入>

臣下はただならぬ様子に、下人を呼び、横川ノ小聖という行者のもとへ使いを走らせます。急ぎ駆けつけた行者が、早速に祈祷を始めると、六条御息所の怨霊が、鬼女の姿で再び現れ、行者を追い返そうとして激しく争います。しかし、その法力には敵わず、ついに祈り伏せられ、悪鬼さながらの怨霊も心を成仏します

【詞章】（『枕ノ段』の部分の抜粋）

今の恨みはありし報い。嗔恚のほむらは。身をこがす。思い知らずや。思い知れ。恨めしの心や。あら恨めしの心や。人の恨みの深くして。憂き音に泣かせ給うとも。生きてこの世にましまさば。水くらき沢辺の螢の影よりも。光る君とぞ契らん。わらわは蓬生の。もとあらざりし身となりて。葉末の露と消えもせば。それさえ殊に恨めしや。夢にだにかえらぬものを我が契り。昔語になりぬれば。なおも思いは増鏡。その面影も恥かしや。枕に立てるやれ車。うち乗せ隠れゆこうよ。うち乗せ隠れゆこうよ。

弱法師（よろぼおし）

【分類】四番目物（現在物＝男物狂物）

【作者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：俊徳丸（面・弱法師）

【あらすじ】（今回の独吟〔初同〕の部分…下線部）

河内国（大阪府）高安の里の左衛門尉通俊（みちとし）は、さる人の讒言を信じ、その子俊徳丸を追放します。しかし、すぐにそれが偽りであることがわかって、不憫に思い、彼の二世安楽を祈って天王寺で施行を行います。一方、俊徳丸は悲しみのあまり盲目となり、今は弱法師と呼ばれる乞食となっています。彼は杖を頼りに天王寺にやって来て、施行を受けます。折りしも今日は、春の彼岸の中日にあたり、弱法師の袖に梅の花が散りかかります。彼は、仏の慈悲をたたえ、仏法最初の天王寺建立の縁起を物語ります。その姿を見ると、まさしく我が子ですが、通俊は人目をはばかって、夜になって名乗ることにします。そして日想観を拝むようにと勧めます。天王寺の西門は、極楽の東門に向かっているのです。弱法師は入り日を拝み、かつては見慣れていた難波の美しい風景を心に思い浮かべ、心眼に映える光景に恍惚となり、興奮のあまり狂いますが、往来の人に行き当たり、狂いから覚めます。物を見るのは心で見るとから不自由はないと達観しても、やはり現実の生活はみじめなものです。やがて夜も更け、人影もとだえたので、父は名乗り出ます。親と知った俊徳丸は我が身を恥じて逃げようとするのですが、父はその手を取り、連れ立って高安の里に帰ります。

【詞章】（今回の独吟〔初同〕の部分の抜粋）

げにいい捨つる言の葉までも。情ありげに聞ゆるぞや。まずまず施行を受けたまえ。受け参らせ候わん。や。花の香のきこえ候。おうこれなる籬の梅の花が。弱法師が袖に散りかかるぞとよ。うたてやな難波津の春ならば。ただこの花とおせあるべきに。今は春べもなかばぞかし。梅花を折って頭にさしはきまざれども。二月の雪は衣に落つ。あら面白の梅の匂いやな。げにこの花を袖に受くれば。花もさながら施行ぞとよ。なかなかのこと草木国土悉皆み法も施行なれば。みな成仏の大慈悲に。もれじと施行につらなりて。手を合わせて。袖をひろげて。花をさえ受くる施行の。いろいろに。受くる施行のいろいろに。匂いきにけり梅衣の。春なれや。なにはの事か法ならぬ。遊び戯れ舞い謡う。誓いの網にはもるまじき。難波の海ぞ頼もしき。げにや盲亀のわれらまで。見る心地する梅が枝の。花の春ののどけきは。難波の法によも漏れじ。難波の法によも漏れじ。

敦盛（あつもり）

【分類】二番目物（修羅物＝公達物） ＊中ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：草刈男（直面）、後シテ：平敦盛の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（今回の独吟〔クセ〕の部分…下線部）

一ノ谷の合戦で、当時 16 歳であった平家の公達平敦盛を討ち取った熊谷直実は、あまりの痛ましさに、無常を感じ、武士を捨てて出家して蓮生と名乗ります。彼は敦盛の菩提を弔うため、再びかつての戦場、摂津国（兵庫県）一ノ谷を訪れます。すると、笛の音が聞こえ、数人の草刈男がやって来ます。その中の一人と笛の話をしているうちに、他の男達は立ち去りますが、その男だけが残っているので、蓮生が不審に思って尋ねると、自分が敦盛の霊であることをほのめかして消え失せます。

<中入>

蓮生は、散策にやって来た須磨の裏の男に、一ノ谷の合戦、敦盛の最後について語ってもらいます。そして、自分は熊谷次郎直実であり、今は出家して敦盛の菩提を弔っているのだと明かします。そう聞いて、土地の男は感心し、敦盛の回向をするように言って立ち去ります。蓮生が夜もすがら念仏を唱え、その霊を弔っていると、武者姿の敦盛が現れ、平家一門の栄枯盛衰を語り、笛を吹き、今様を謡った最後の宴を懐かしんで舞います。続いて敦盛は討死の様子を見せ、その敵に巡り会ったので、仇を討とうとしますが、後生を弔っている今の蓮生はもはや敵ではないと、回向を頼んで消え去ります。

【詞章】（今回の独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

然るに平家。世をとって二十餘年。まことに一昔の。過るは夢のうちなれや。寿永の秋の葉の。四方の嵐にきそわれ。散りぢりになる一葉の。舟に浮き波に臥して夢にだにも帰らず。籠鳥の雲を恋い。帰雁行を乱るなる。空定めなき旅衣。日も重なりて年なみの。立ち帰る春の頃。この一の谷にこもりて。しばしはここに須磨の浦。うしろの山風吹き落ちて。野も冴えかえる海際の。船の夜となく昼となき。千鳥の声もわが袖も波にしおるる磯枕。海人の苦屋に共寝して。須磨人にのみ磯馴れ松の。立つるやうす煙。柴というもの折り敷きて。思いを須磨の山里の。かかる所に住まいして。須磨人となりはつる。一門の果ぞ。悲しき。

鶴亀（つるかめ）

【分類】初番目物（脇能＝唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

月宮殿の白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる。花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬は冴えゆく雪の袂を。ひるがえす衣も薄紫の。雲の上人の舞楽のかずかず。げいしょう羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿を早め。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

田村（たむら）

【分類】二番目物（修羅物＝勝修羅） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：坂上田村麻呂の霊（面・平太）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

東国の僧が、都見物に来て、3月半ばに清水寺に着き、爛漫と咲いたそがれ時の桜花に見とれていると、箒を手にした一人の童子が現れ、その木陰を清めます。そこで、僧がこの寺の来歴を尋ねると、それに応じて、清水寺建立の縁起を詳しく語ります。また、あたりの名所を教え、ともに桜月夜の風情を楽しみます。その様子が常の人とはどうも違うのを訝った僧が、童子に名を尋ねると、我が名を知りたいのならば帰る方を見て下さいと、田村堂の内陣へと姿を消します。

<中入>

僧が夜通しで桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武将姿の坂上田村麻呂の霊が現れます。そして、勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に千手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした様子を語り、これも観音の仏力であると述べます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

千方といっし逆臣に。仕えし鬼も。王地を侵す天罰にて。千方を捨つればたちまち亡び失せしぞかし。ましてや間近き。鈴鹿山。ふりさけ見れば伊勢の海。ふりさけ見れば伊勢の海。阿濃の松原むらだち来たつて。鬼神は。黒雲鉄火をふらしつつ。数千騎に身を変じて山の。如くに見えたる所に。あれを見よ。不思議やな。あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に。千手観音の。光をはなつて虚空に飛行し。千の御手ごとに。大悲の弓には。知恵の矢をはげて。ひとたび放てば千の矢先。雨あられと降りかかって。鬼神の勢に。乱れ落つれば。ことごとく矢先にかかって鬼神は残らず討たれにけり。有難し有難しや直に咒咀諸毒薬念彼。観音の力を合わせて。すなはち還着於本人。すなはち還着於本人の。敵は亡びにけりこれ。観音の。仏力なり。

誓願寺（せいがんじ）

【分類】三番目物（鬘物） ＊序ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、後シテ：和泉式部の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

一遍上人が熊野権現に参籠している時に、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」の札を広めよという霊夢を見ます。そこで、上人は都に上り、念仏の大道場、誓願寺で御札を配ばります。すると、一人の女性が御札の言葉を見て、「六十万人より外は往生できないのでしょうか」と問いかけます。上人は、「これは霊夢の、六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華の四句の上の字をとったものであり、南無阿弥陀仏とさえ唱えれば誰もが必ず往生できる」と説きます。すると女性はありがたがり、「本堂の『誓願寺』の寺額に替えて、上人の手で『南無阿弥陀仏』の六字の名号をお書きください。これはご本尊阿弥陀如来の御告です。私はあの石塔に住む者です」と言って、近くの和泉式部のお墓に姿を消します。

<中入>

一遍上人が『南無阿弥陀仏』の名号を書いて本堂に掲げたところ、どこからともなく良い香りがし、花が降り、快い音楽が聞こえ、瑞雲に立たれた阿弥陀如来と二十五菩薩と共に、歌舞の菩薩となった和泉式部が現れます。そして、誓願寺が天智天皇の勅願によって創建された縁起を語ります。続いて、阿弥陀如来が西方浄土より誓願寺に来迎される模様などを表す荘厳優美な舞が舞います。最後に、菩薩聖衆みな一同に本堂の六字の額に合掌礼拝します。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

ひとりなお。仏の御名を。尋ね見ん。おのおの帰る法の場人。法のにわびと法の場人の。声も妙なり称名の数数。虚空にひびくは。音楽の声。異香薫じて。花ふる雪の。袖をかえずや返す返すも。貴き上人の利益かなと。菩薩聖衆は面に。御堂に打てる。六字の額を。皆一同に。礼し給うは。あらたなりける。奇瑞かな。

絃上（けんじょう）

【分類】四・五番目物（貴人物、略協能） ＊早舞

【作者】不詳（金剛弥五郎？）

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉または三光尉）、
後シテ：村上天皇の霊（面・中將）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の太政大臣藤原師長は、天下に隠れもない琵琶の名手です。もはやわが国にはライバルはいないと思い、唐（中国）に渡ってさらにその奥義を窮めようと、従者を伴い、都を出て須磨の浦までやって来ます。そこで、一夜の宿を借りた塩屋の主の望みに応じて、師長が一曲弾っていると、にわかには村雨が降り来り、板庇を打ちます。すると老夫婦が、苫を取り出して板屋を葺いて調子を整えます。師長はその措置に驚き、音曲に嗜みのある者と見て、一曲を所望します。すると翁は琵琶、姥は琴によって越天楽を合奏します。師長はその神技に感じ、国内に自分より優れた弾き手はいないと思いがったことを深く恥じて、立ち去ろうとします。老夫婦はこれを引き止め、自分達は村上天皇と梨壺女御の霊であり、師長の入唐を止めるために現れたのだと述べて姿を消します。

<中入>

やがて村上天皇の霊が神々しい装束で現れ、龍神に命じて、竜宮に持ち去られた獅子丸の琵琶を取り寄せ、これを師長に下賜します。そして自らも、興に乗じて秘曲を奏で、舞を舞って昇天します。師長は、何よりの土産と名器をたずさえて都に戻ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

獅子には文殊やめさるらん。獅子には文殊やめさるらん。帝は飛行の車に乗じ。八大竜馬に引かれたまえば。師長も飛馬にむちをあげて。馬上に琵琶をたずさえて。馬上に琵琶をたずさえて。須磨の帰洛ぞ。ありがたき。

猩々（しょうじょう）

【分類】五番目物（祝言物） ＊中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰っていきました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽によって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども
変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏
したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

弓八幡（ゆみやわた）

【分類】初番目物（脇能） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：高良ノ神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

後宇多院に仕える臣下が、如月初卯の男山八幡宮（石清水八幡宮）の如月初卯の神事に陪従として参詣するよう命じられ、八幡宮に向います。やがて八幡宮に着き、参詣しようとする、一人の男を伴い、錦の袋に納めた弓を持った老翁がいます。不思議に思って尋ねると、老翁は「私は長年この八幡宮に仕えているもので、桑の弓を君に捧げようと思い、あなたを待っていたのです」と答えます。そして、桑の弓を袋に納めたまま君に捧げるいわれなどを詳しく語り、さらに、八幡宮のいわれを語り、実は自分は高良の神で、君を守るためにここに現れたと言ひ、かき消すように消えてしまいます。

<中入>

臣下が神託を伝えるため、都に帰ろうとすると、どこからか音楽が聞こえ、良い香が薫ってきます。するとそこへ、高良〔かわら〕の神がその姿を現し、舞を舞い、御代を祝い、八幡宮の神徳を讃えます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

あら有難やもとよりも。人の国よりわが国。他の人よりはわが人と。誓いの末もあきらけき。真如実相の月弓の。八百万代に末までも。動かず絶えず君守る。高良の神とは。わが事なり。二月の。初卯の神楽おもしろや。うたえや謡え。日影さすまで。そでの白木綿かえすがえすも。千代の声ごえ。謡うとかや。

<神舞>

げにや末世と。言いながら。げにや末世と言ひながら。神の誓いはいやましに。かくあらたなる御相好。拝むぞたっとかりける。君を守りの御誓い。もとより定めある上に。殊にこの君の神徳。天下一統と守るなり。げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに。この山上に宮居せし。神の昔は。ひさかたの。月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類鳩吹く松の風までも。皆神体と現れ。げにたのもしき神ごころ。示現大菩薩八幡の。神徳ぞ豊かなりける。神徳ぞ豊か。なりける。

鶴亀（つるかめ）

【分類】初番目物（脇能＝唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：皇帝（直面）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

昔、中国では年の始めに、華麗な宮殿で、四季の節会の最初の儀式が行われました。まず、官人が出て、御代を讃え、皇帝が月宮殿に行幸なる由を触れます。皇帝は大臣たちを従えて登場し、宮殿に着座して、群臣から拝賀を受けます。ついで大臣は毎年の嘉例により、鶴亀を舞わせることを奏聞します。池の水ぎわに遊ぶ鶴と亀は、皇帝の長寿を讃えてめでたく舞い納めると、皇帝も喜び、国土の繁栄を祝って、自ら舞を舞い、やがて長生殿へと帰っていきます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

千代の例の数々に。千代の例のかずかずに。なにを引かまし姫小松の。緑の亀も舞い遊べば。丹頂の鶴も一千年の。齡を君に授け奉り。庭上に参候申しければ。君も笑壺にいらせたまい。舞樂の数をぞ。奏しける。

<楽>

月宮殿の。白衣の袂。月宮殿の白衣の袂の。いろいろ妙なる花の袖。秋は時雨の紅葉の葉袖。冬はきえゆく雪の袂を。ひるがえす衣もうす紫の。雲の上人の舞樂のかずかず。霓裳羽衣の曲をなせば。山河草木国土豊に千代万代と。祝い奉り。官人駕輿丁御輿をはやめ。君の齡も長生殿に。君の齡も長生殿に。還御なるこそ。めでたけれ。

籬（えびら）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：里人（直面）、後シテ：梶原源太の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州から都見物を志す一人の旅の僧が、早春の頃、須磨の浦の生田川のほとりに着きます。ちょうどそこに、色あざやかに咲いている梅の木があるので、来合わせた男に問うと、籬の梅だと答えるので、どうしてそういう名がついたのかと尋ねます。その男は源平の合戦の時、源氏方の若武者梶原源太景季が折から咲き誇っていた梅の花を手折って、笠印の代わりに籬にさし、めざましい活躍をしたので、籬の梅の名が残ったとその由来を語ります。さらに一ノ谷の合戦の様子を詳しく物語るのので、僧が不審がると、男は自分は景季の亡霊だと名乗って、たそがれ時の梅の木陰に消え失せます。

<中入>

土地の者から重ねて籬の梅の話聞いた僧は、奇特の思いに立ち去りかね、木陰で仮寝をしていると、夢に武者姿の影季が現れ、修羅道での苦患を見せ、また往昔の合戦でのめざましい戦ぶりを見せたかと思うと、夜明けと共に回向を頼んで消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

山も震動。海も鳴り。雷火も乱れ。悪風の。紅焰の旗をなびかし。紅焰の旗をなびかして。閻浮に帰る生田河の。波を立て水をかえし。山里海川も。みな修羅道の巷となりぬ。こはいかにあきましや。しばらく心を静めて見れば。所は生田なりけり。時も昔の春の。梅の花盛りなり。ひと枝手折りて籬にさせば。もとよりみやびたる若武者に。あいおう若木の花かずら。かくれば籬の花も源太も。我先駆かけん先駆かけんとの。心の花も梅も。散りかかって面白や。敵のつわものこれを見て。あっぱれ敵よ逃すなとて。八騎が中にとりこめらるれば。兜も打ち落とされて。大童の姿となつて。郎等三騎に後ろをあわせ。向う者をば。拝み打ち。まためぐりあえば。車斬り。蜘蛛手かく繩十文字。鶴翼飛行の秘術を尽くすと見えつるうちに夢覚めて。しらしらと夜も明くれば。これまでなりや旅人よ。暇申して花は根に。鳥は古巢に帰る夢の。鳥は古巢に帰るなり。よくよく弔いてたびたまえ。

羽衣（はごろも）

【分類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：天人（面・増女）

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

駿河国(静岡県)三保の松原に住む白龍という漁師が今日も釣にやって来ます。そして、のどかな浦の景色を眺めていると、いい匂いがしてきます。あたりを見廻すと、一本の松の木の枝に美しい衣がかかっています。そこで、家宝にでもしようとして持って帰りかけると、一人の女性が現れて呼び止め、それは自分のものだから返してほしいと頼みます。その女性が天人であり、その衣が天の羽衣であることを聞かされた白龍は、そんなに珍しいものかと喜び、国の宝にしようとして返そうとしません。天人は羽衣がなくては天に帰れないと、空を仰いで嘆き悲しみます。その姿があまりに哀れなので、白龍は、羽衣を戻すかわりに、天人の舞楽を見せてほしいと頼みます。天人は喜んで承知し、羽衣を着て月世界における天人の生活の面白さや、三保の松原の春景色をたたえた舞を舞いながら、天空へと上っていきます。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

あずま遊びのかずかずに。あずま遊びのかずかずに。その名も月の。色人は。三五夜中の空にまた。満願真如の影となり。御願円満国土成就。七宝充滿の宝をふらし。国土にこれを施したもう。さるほどに。時移って。天の羽衣。浦風にたなびきたなびく。三保の松原浮き島が雲の。足高山や富士の高根。かすかになりて天つみ空の。霞にまぎれて失せにけり。

柏崎（かしわざき）

【分類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：柏崎某の妻（面・曲見）、

後シテ：柏崎某の妻・狂女（面・曲見）

【あらすじ】（今回の仕舞〔道行〕の部分…下線部）

越後国（新潟県）の柏崎の領主某の従者が鎌倉から帰国し、主人である柏崎の領主が鎌倉で急逝したことを領主の妻に報告します。それを聞いた領主の妻は夫の死を受け入れることなどできないと嘆き悲しみます。さらに、父の死を嘆いて出家するという息子花若からの手紙を目にし、夫と息子という愛する二人を一度に失った領主の妻の嘆きは、わが子への恨みに変わります。しかし、その一方でわが子を守り給えと神仏に祈るのでした。

<中入>

時が過ぎ、信濃国（長野県）の善光寺で、僧の姿をした花若が、住職に伴われて如来堂に向っています。阿弥陀如来へのお勤めを始めて、今日がちょうど満参日に当たるのです。そこへ一人の狂女が現れます。この女こそ、夫の成仏を願い、子の無事を願っているうちに、仏に導かれるようにこの善光寺へやって来た柏崎の領主の妻でした。如来堂に上がり、夫の成仏を祈念しようとする狂女に、住職は女人の身で如来堂に上ることは叶わぬゆえ、早々に立ち去るよう伝えます。しかし、狂女は如来堂から立ち去ろうとせずに、供物として持参した夫の形見の烏帽子と直垂を取り出して、自らの心の内を阿弥陀如来に訴え始めます。その狂女の一途な様子を見ていた花若は、自分こそ息子であると狂女の前に名乗り出ます。互いの変わり果てた姿にしばし呆然とする母と子ですが、それが現実であることを知ると、心の底から互いの無事と再会を喜び合うのでした。

【詞章】（今回の仕舞〔道行〕の部分の抜粋）

越後の国府に着きしかば。越後の国府に着きしかば。人目も分かぬわが姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。うら遙々と行くほどに。松陰遠く寂しきは。常盤の里の夕べかや。われにたぐえて。あわれなるはこの里。子ゆえに身を焦がしては、野べの木島の里とかや。降れども積もらぬ淡雪の。浅野というはこれかとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見なして。西に向かえば善光寺。生身の弥陀如来、わが狂乱はさて置きぬ。死して別れし。夫を導きおわしませ。

熊坂（くまさか）

【分類】四、五番目物（切能）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：僧（直面）、後シテ：熊坂長範の霊（面・長霊癒見）

【あらすじ】（今回の仕舞の部分…下線部）

都の僧が東国への旅を志し、都を出て美濃国（岐阜県）赤坂まで来たとき、一人の僧に呼びとめられます。そして、今日が命日の者のために回向をしてくれと、草原の中の古墳に伴われ、その僧の庵室に案内されます。みると、その庵には仏の絵像も木像もなく、大長刀や武具が並べられているので、不審に思って尋ねます。すると、この辺りは山賊夜盗が出るので、通行人の危難を救うための用意で、この土地では頼りにされていると答えます。そして、「お休みあれ」と何処ともなく去って行きます。

<中入>

旅僧は、草庵が消えて、松陰の草むらに座っているのに気がつきます。ちょうど来合わせた土地の者から、この地で討たれた熊坂長範の話聞き、さてはさっきの僧は熊坂の幽霊であったかと思い、読経し回向を始めます。すると、長刀を担いだ熊坂の霊が現れます。そして、ここで奥州へ下る金売り吉次一行を襲ったが、逆に牛若丸によって討たれた次第を物語り、松陰に隠れるように消え失せます。

【詞章】（今回の仕舞の部分の抜粋）

機嫌はよきぞ。はや。入れと。いうこそほども。ひさしけれ。いうこそほどもひさしけれ。皆われ先にと松明を。投げ込み投げ込み乱れ入る。いきおいはようやく神も。面を向くべきようぞなき。しかれども牛若子。少しも恐るるけしきなく。小太刀を抜いて渡り合い。獅子ふんじん虎らんにう。飛鳥の翔りの手を碎き。攻め戦えばこらえず。表に進む十三人。同じ枕に斬り伏せられ。そのほか手負い太刀を捨て。具足を奪われ這うほう逃げて。命ばかりをのがるもあり。熊坂いうよう。この者どもを手の下に。討つはいかさま鬼神か。人間にてはよもあらじ。盗みも命のありてこそ。あら枝葉や引かんとて。長刀杖に突き。うしろめたくも引きけるが。熊坂思うよう。熊坂思うよう。ものものしその冠者が。斬るといともさぞあるらん。熊坂秘術を奮うならば。いかなる天魔鬼神なりとも。宙に擲んで微塵になし。討たれたる者どもの。いで孝養に報ぜんとして。道より取って返し。例の長刀引き側め。折り妻戸を小楯にとって。かの小男を狙いけり。牛若子のご覧じて。太刀抜き側め物間を。少し隔てて待ち給う。熊坂も長刀構え。たがいにかかるを待ちけるが。苛って熊坂左足を踏み。

鉄壁も通れとつ長刀を。はっしと打って。弓手へ越せば。追っかけ透かさず込む長刀に。ひらりと乗れば刃向きになし。退って引けば馬手へ越すを。おっ取り直してちょうど斬れば。宙にて結ぶを解く手に。却って払えば飛び上がって。そのまま見えず形も失せて。ここやかしこと尋ねるところに。思いも寄らぬ後より。具足の間隙をちょうど斬れば。こはいかにあの冠者に。斬らるることの腹立ちさよと。いえども天命の。運の極めぞ。無念なる。

弱法師（よろぼおし）

【分類】四番目物（現在物＝男物狂物）

【作者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：俊徳丸（面・弱法師）

【あらすじ】（今回の独吟〔クセ〕の部分…下線部）

河内国（大阪府）高安の里の左衛門尉通俊（みちとし）は、さる人の讒言を信じ、その子俊徳丸を追放します。しかし、すぐにそれが偽りであることがわかって、不憫に思い、彼の二世安楽を祈って天王寺で施行を行います。一方、俊徳丸は悲しみのあまり盲目となり、今は弱法師と呼ばれる乞食となっています。彼は杖を頼りに天王寺にやって来て、施行を受けます。折りしも今日は、春の彼岸の中日にあたり、弱法師の袖に梅の花が散りかかります。彼は、仏の慈悲をたたえ、仏法最初の天王寺建立の縁起を物語ります。その姿を見ると、まさしく我が子ですが、通俊は人目をはばかって、夜になって名乗ることにします。そして日想観を拝むようにと勧めます。天王寺の西門は、極楽の東門に向かっているのです。弱法師は入り日を拝み、かつては見慣れていた難波の美しい風景を心に思い浮かべ、心眼に映える光景に恍惚となり、興奮のあまり狂いますが、往来の人に行き当たり、狂いから覚めます。物を見るのは心で見るとから不自由はないと達観しても、やはり現実の生活はみじめなものです。やがて夜も更け、人影もとだえたので、父は名乗り出ます。親と知った俊徳丸は我が身を恥じて逃げようとはしますが、父はその手を取り、連れ立って高安の里に帰ります。

【詞章】（今回の独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

しかるにこの中間において。何と心をのばめまし。これによって上宮太子。国家をあらため万民を教え。仏法流布の世となしてあまねくみ法を弘めたもう。すなわち当寺をご建立あって。始めて僧尼の姿を現わし。四天王寺と。名づけたもう。金堂のご本尊は。如意輪の仏像。救世観音とも申すとか。太子のご前生。震旦国の思禅師にて。わたらせ給う故。出家の仏像に応じつつ。いま日域にいたるまで。仏法最初のご本尊と。現われたもうおん威光の。まことなるかなや末世相応のおん誓い。しかるに。当寺の仏閣の。み作りの品品も赤梅檀の靈木にて。塔婆の金宝にいたるまで。閻浮檀金なるとかや。よろず代に。すめる亀井の水までも。水上清き西天の。無熱の池水を受けつぎて。流れ久しき代代までも。五濁の人間を導きて。済度の舟をも寄するなる。難波の寺の。鐘の聲。異浦浦に響きて。あまねく誓い満ち潮の。おし照る海山も。みな成仏の姿なり。

海人（あま）

【分類】初・五番目物（略脇能物＝女菩薩物） ＊早舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：海人（面・曲見）、後シテ：龍女（面・泥眼）

【あらすじ】（『玉ノ段』の部分…下線部）

房前大臣（藤原房前）は讃岐国（香川県）の志度の浦で亡くなったという母の追善のため、従者と供人を伴って、はるばる志度の浦までやって来ます。すると、一人の海人が現れます。従者が、海人に水底に映る月を見たいので、梅松布〔みるめ〕を刈るように命ずると、海人は昔も、宝の珠を海底から取り上げるためにもぐったことがあると言い、昔、唐土から興福寺に三種の宝が贈られたが、そのうち面向不背の珠だけが、この浦の沖で龍宮に取られてしまった。藤原淡海公（藤原不比等）はそのことを深く惜しまれ、身をやつしてこの浦に下り、海人乙女と契りを交わし、その玉を取り返してくれるように頼んだこと、海人が淡海公の子をもうけ、その子が今の房前大臣であることを語ります。これを聞いた房前大臣が、それは自分のことだと名乗ると、海人は、我が子を淡海公の後継ぎにする約束と交換に、千尋の綱を腰に結わえ、海に潜り、見事に珠を取り返すものの、龍神の激しい抵抗にあい、自分の乳の下を掻き切って、そこに珠を隠し、流れ出る血潮に龍神がたじろぐうちに、息も絶え絶えになりながら海人は帰ってきたものの、息を引き取りましたと語り、自分こそ、その海人の亡霊であると明かし、海中に姿を消します。

<中入>

房前大臣は、浦の者からも珠取りの次第を聞き、亡き母の残した手紙を読み、十三回忌の追善供養を営みます。読経のうちに、亡霊は龍女の姿で現れ、法華経の功德で成仏できたと喜び、舞を力強く、美しく舞います。

【詞章】（『玉ノ段』の部分の抜粋）

その時人人力を添え。引きあげ給えと約束し。一つの利剣を、抜きもって。かの海底にとび入れば。空はひとつに雲の波。煙の波をしのぎつつ。海漫々とわけ入りて。直下とみれども底もなく。ほとりも知らぬ海底に。そも神変はいさ知らず。とり得ん事は不定なり。かくて龍宮にいたりて。宮中をみればその高さ。三十丈の玉塔に。かの玉をこめおき。香華を供え守護神に。八龍なみいたり。その外悪魚鰐の口。のがれがたしやわが命。さすが恩愛の。ふる里の方ぞ恋しき。あの波のあなたにぞ。我が子はあるらん。父大臣もおわすらん。さるにてもこのままに。別れはてなん悲しさよと。涙ぐみて立ちしが。又思い切りて。手を合わせ。なむや志渡寺の観音薩埵の。力を合わせてたび給えとて。大

悲の利劍を額にあて、龍宮の中にとび入れば。左右へばっとぞのいたりける。そのひまに宝珠を盗みとって。逃げんとすれば。守護神追かく。かねてたくみし事なれば。持ちたる劍をとり直し。乳の下をかききり玉をおしこめ。劍を捨ててぞふしたりける。龍宮のならいに死人をいめば。辺りに近づく悪龍なし。約束の繩を動かせば。人々喜び引きあげたりけり。玉は知らずあまびとは海上にうかみ。いでたり。

養老（ようろう）

【分類】初番目物（脇能） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：山神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

初夏に美濃国（岐阜県）本巢郡に霊水が湧き出るといふ報告があつたので、雄略天皇の勅命を受けて勅旨が下向します。一行が養老の滝のほとりに着くと、老人と若者の二人のきこりがやってきました。勅使はこれこそ話に聞く養老の親子であろうと思つて尋ねると、果たしてさうでした。老人は問われるままに養老の滝と名づけられたいわれを物語ります。次いで老人は勅旨を滝壺に案内し、霊泉をほめ、他の霊水の例を挙げつつ、この薬の水の徳をたたえます。すべてを見聞した勅使が感涙を流し、この由を奏聞しようと都に帰ろうとすると、天から光がさし、花が降り、音楽が聞こえ、ただならぬ様子となります。

<中入>

そこへ土地の者が来て養老の滝のいわれを語り、滝の水を飲んで若返りの様を見せます。続いて養老の山神が出現し、清らかな水をたたえ、神仏はもとより同体であり、共に衆生を救おうとの御誓願であつて、時として神として現れ、仏として現れるのであると述べます。そして、峰の嵐や谷川の音を音楽として舞を舞い、太平の世を祝して神の国に帰っていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

松陰に。千代をうけたる。みどりかな。さもいさぎよき山の井の水。山の井の水。山の井の水。水とうとうとして。波悠々たり。治まる御代の。君は船。君は船。臣は水。水よく船を。浮め浮めて。臣よく君をあおぐ御代ぞといく久しきも。尽きせじや尽きせじ。君に引かるる玉水の。上澄む時は。下も濁らぬ滝津の水の。浮き立つ波の。返すがえすも。よき御代なれや。よき御代なれや。万歳の道に帰りなん。万歳の道に帰りなん。

女郎花（おみなめし）

【分類】四番目物（執心物） ＊カケリ

【作者】亀阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：小野頼風の霊（面・中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

九州松浦湍の僧が都見物を思い立ち上洛して来ます。その途中、故郷の宇佐八幡と御一体である石清水八幡宮に参詣しようと、男山の麓まで来かかります。折しも秋なので、野辺には女郎花が美しく咲き乱れています。男山の女郎花は古歌にも詠まれたほどの由緒のある名草なので、一本手折って土産にしようと立ち寄りますと、一人の老人が現れて、それを止めます。二人は花を折ることの可否を、たがいに古歌を引いて論じ合います。僧があきらめて立ち去ろうとすると、老人はいろいろ古歌を知っている風流な人だとほめ、八幡宮の社前に案内し、さらに麓の男塚・女塚にも連れて行って、これは小野頼風夫婦の墓であると教え、今は誰も弔う人がないと嘆き、自分がその頼風である、とほのめかして消え失せます。

<中入>

旅の僧は土地の人から、詳しく頼風夫婦の話聞き、その夜はその場所で読経をすることにします。僧が回向をしていると、塚から頼風夫婦の亡霊が現れます。女はもと都の者で、頼風と契りましたが、その心を疑って放生川に身を投げます。女の亡骸を土中に埋めると、その塚から女郎花が咲き出します。頼風はそれを哀れんで、同じく川に身を投げました。その亡骸を埋めたところが男塚であると物語り、今はともに邪淫の悪鬼に責められている、と僧に成仏を願います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

頼風その時に。かのあわれきを思ひ取り。むざんやな我故に。よしなき水の泡と消えて。徒らなる身となるも。ひとえに我が咎ぞかし。しかじ憂き世に住まぬまでぞ。同じ道にならんとて。続いてこの川に身を投げて。ともに土中に籠めしより。女塚に対して。また男山と申すなり。その塚はこれ主は我。幻ながら来たりたり。跡弔むらいて賜ひ給え。跡弔むらいて賜ひ給え。あら閻浮。恋しや。邪淫の悪鬼は身を責めて。邪淫の悪鬼は身を責めて。その念力の。道もさがしき剣の山の。上に恋しき人は見えたり嬉しやとて。行き登れば。剣は身を通し。磐石は骨を砕く。こはそもいかにに恐ろしや。剣の枝のたわむまでいかなる罪の。なれる果ぞや。よしなかりける。花のひと時を。くねるも夢ぞ女郎花。露の台や花の縁に。浮かめて賜ひ給え。罪を浮かめて賜ひ給え。

東北（とうぼく）

【分類】三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：都の女（面・小面）、後シテ：和泉式部の霊（面・小面）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

東国より都へ上って来た旅僧が、東北院の和泉式部の住居跡を訪れます。折から花ざかりの一本の梅の木を見て、感じ入っていると、美しい一人の里女が現れて、話しかけてきます。そして、この梅は、今は「和泉式部」、「好文木」、「鶯宿梅」などさまざまに呼ばれているが、以前ここが上東門院の御所であった頃、和泉式部が植えて、「軒端の梅」と名付けたのだと、その由緒を語り、また、あの方丈は式部の寝所をそのまま残したものであると語ります。そして、花も、昔の主人である和泉式部を慕うかのように、年々に色も香も増して咲き続けているというので、旅僧が感心すると、自分こそ、この梅の主の和泉式部であると述べて、花の陰に消え失せます。

<中入>

旅僧は、門前の者からも和泉式部の物語を聞き、梅の木陰で夜もすから読経します。すると、式部の霊が、ありし日の美しい上臈の姿で現れます。そして、昔、御堂関白藤原道長が、今あなたが読誦している法華経を高らかに誦しながら、この門前を通られるのを聞いて、「門の外 法の車の 音聞けば われも火宅を 出でにけるかな」と詠んだが、その功德により、死後、火宅の苦しみをのがれ、歌舞の菩薩になったと語ります。さらに和歌の徳や、東北院の霊地であることを讃え、美しい舞を舞って、やがて暇を告げて方丈に入ったかと思うと、僧の夢は覚めます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

袖ふれて舞人の。かえすは小忌衣。春鶯囀という楽は。これ春の鶯。鶯宿梅はいかにや。これ鶯のやどりなり。好文木はさていかに。これ文を好む木なるべし。唐のみかどの御時は国に。文学さかんなれば。花の色もますます匂い常よりみちみち。梅風よもに薫ずなる。これまでなりや花は根に。鳥は古巢に帰るとて。方丈の灯を。火宅とや猶人はみん。こここそ花の台に。和泉式部がふしどよとて。方丈の室に入ると見えし。夢はさめにけり。見えつる夢はさめにけり。

鵜飼（うかい）

【分類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癒見）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと言ひ、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

法華は利益深きゆえ。邪道に沈む群類を。救わんために来たりたり。げに有難き誓いかな。妙の一字はさていかに。それは褒美の言葉にて。妙なる法と説かれたり。經とはなどや名付くらん。それ聖教の都名にて。二つもなく。三つもなく。ただ一乗の徳によりて。奈落に沈み果てて。浮かみがたき悪人の。仏果を得ん事は。この經の利益ならずや。これを見かれを聞く時は。これを見かれを聞く時は。たとい悪人なりとて。慈悲の心を先として。僧会を供養するならば。その結縁に引かれつつ。仏果菩提に至るべし。げに往來の利益こそ。他を助くべき力なれ。他を助くべき力なれ。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：尉（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ熊手と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をすると、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松いく世経ぬらん。むつましと君は知らずや瑞がきの。久しき世々の神かぐら。夜のつづみの拍子を揃えて。すゞしめ給え。宮づこたち。西の海。あおきがはらの波間より。あらわれいでし。住の江の。春なれや。残の雪のあさかがた。玉藻かるなる岸陰の。松根によって腰をすれば。千年の緑。手にみてり。梅花を折って、首にさせば。二月の雪、ころもに落つ。

<神舞>

有難の影向や。有難の影向や。月すみよしの神あそびみかげを拝むあらたさよ。げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいだき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声ぞ楽しむさっさっの声ぞ楽しむ。

経政（つねまさ）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：平経政の霊（面・童子）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

京都の仁和寺、御室御所〔おむろごしょ〕の守覚〔しゅがく〕法親王は、琵琶の名手である平経政を少年の頃から寵愛されていました。ところが、このたびの一ノ谷での源平の合戦において、経政が討ち死にしたので、生前、彼にお預けになったこともあった「青山〔せいざん〕」という銘のある琵琶の名器を仏前に供え、管絃講〔かげんこう〕を催して回向するように行慶〔ぎょうけい〕僧都に仰せつけになります。行慶は、管絃を奏する人々を集めて法事を行います。すると、その夜更けになって、経政の亡霊が幻のように現れ、御弔いのありがたさに、ここまで参ったのであると僧都に声をかけます。そして、手向けられた琵琶を懐かしく弾き、夜遊の舞を舞って興じます。しかし、それもつかの間、やがて修羅道の苦しみに襲われ、憤怒の思いに戦う自分の姿を恥じ、灯火を吹き消して闇の中に消え失せます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

一声の鳳管は。秋秦嶺の雲を動かせば。鳳凰もこれにめでて。桐竹に飛びくだりて。翼を連らねて舞い遊べば。律呂の声声に。心声に発す。声文をなす事も。昔を返す舞の袖。衣笠山も近かりき。面白の夜遊や。あら面白の夜遊や。あら名残惜しの。夜遊や。

<カケリ>

あら名残惜しの夜遊やな。たまたま閻浮の夜遊に帰り。心をのぶるところに。修羅道の苦しみご覧ぜよ。また修羅の嗔恚が。おこるぞとよ恨めしや。さきに見えつる人影の。なお現わるるは経政か。あら恥かしや嗔恚の有様。はや人々に見えけるか。あの灯火を。消したまえとよ。灯火をそむけては。灯火をそむけては。ともに憐れむ深夜の月をも。手にとるや帝釈修羅の。戦は火を散らして。嗔恚の矢先は雨となって。身にかかれば払う剣は。他を悩しわれと身を切る。紅波はかえって猛火となれば。身をやく苦患恥ずかしや。人には見えじものを。あの灯火を消さんとて。その身は愚人夏の虫の。火を消さんと飛び入りて。嵐とともに灯火を。嵐とともに。灯火を吹き消して。暗まぎれより。魄霊は失せにけり。魄霊の形は。失せにけり。

船弁慶（ふなべんけい）

【分類】五番目物（怨霊物） ＊中ノ舞（前シテ）、舞働（後シテ）

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：静御前（面・小面）、
後シテ：平知盛の怨霊（面・怪士〔あやかし〕）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

源義経は、平家追討に武功を立てますが、戦が終わると、かえって兄頼朝から疑いをかけられ、追われる身となります。義経は、弁慶や従者と共に都を出、攝津国（兵庫県）大物浦から西国へ落ちようとしています。静御前も、義経を慕ってついて来ますが、弁慶は時節柄同行は似合わしくないから、都へ戻すように義経に進言し、了承を得ます。弁慶は静を訪ね、義経の意向を伝言しますが、静は弁慶の計らいであろうと思い、義経に逢って直接返事をするといひます。義経の宿に来た静は、直接帰京をいいわたされ、従わざるを得ず、泣き伏します。名残りの宴が開かれ、静は、義経の不運を嘆きつつ、別れの舞を舞います。やがて出発の時となり、涙ながらに一行を見送ります。

<中入>

弁慶は、出発をためらう義経を励まして、船頭に出発を命じます。船が海上に出ると、にわかにな風が変わり、激しい波が押し寄せて来ます。船頭は必死に船をあやつりますが、吹き荒れた海上に、西国で滅亡した平家一門の亡霊が現れます。中でも平知盛の怨霊は、自分が沈んだように、義経を海に沈めようと長刀を持って襲いかかって来ます。義経は少しも動ぜず戦いますが、弁慶は押し隔てて、数珠を揉んで祈祷します。祈られた亡霊は、しだいに遠ざかり、ついに見えなくなります。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

然るに勾踐は。ふたたび世をとり、会稽の恥をすすぎしも陶朱功をなすとかや。
されば越の臣下にて。政をみにまかせ。功名富たっとく。心の如くなるべきを。
功なり名をとげて身しりぞくは。天の道と心得て。小船に掉さして五湖の遠島
をたのしむ。かかる例しも有明の。月の都をふりすてゝ。西海の波濤におもむ
き御身の科のなきよしを。なげき給わば頼朝も。ついにはなびく青柳の。枝を
つらぬる御契り。などかはくちし、はつべき。

野守（のもり）

【分類】五番目物（切能＝鬼神物） ＊舞働

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：野守（面・三光尉）、後シテ：鬼神（面・小癡見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山からやって来た山伏が、大峰葛城山へと参る途中、大和国（奈良県）春日の里に着きます。そして、誰かに、このあたりの名所について聞きたいものだと思っていると、ちょうど一人の老人がやって来ます。そこで、近くにあったいわれのありそうな池について尋ねます。すると老人は、私のような野守が姿を写すので、この池は「野守の鏡」と呼ばれているが、本当の「野守の鏡」というのは、昼は人となり、夜は鬼となってこの野を守っていた鬼神の持っていた鏡のことだと答えます。さらに、「はし鷹の 野守の鏡 得てしかな 思い思わず よそながら見ん」という和歌は、この池について詠まれたのかと山伏が聞くと、老人は、昔この野で御狩のあった時、御鷹を逃がしたが、この水の姿が写ったので行方がわかったから、その歌が詠まれたのだと語ります。山伏がまことの野守の鏡を見たいものだというと、鬼神の持つ鏡を見れば、恐ろしく思うであろうから、この水鏡を見なさいと言い、老人は塚の中へ姿を消します。

<中入>

山伏は、ちょうど来合わせた土地の人から、野守の鏡の名の由来などを再び聞かされ、先の老人は、野守の鬼の化身であろうと告げられます。そこで、この奇特を喜んで塚の前で祈っていると、鬼神が鏡を持って現れ、天地四方八方を写して見せた後、大地を踏み破って奈落の底へと消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

東方。降三世明王もこの鏡にうつり。また南西北方を映せば。八面玲瓏と明きらかに。天を映せば。非想非非想天までくまなく。さてまた大地をかがみ見れば。まず地獄道。まずは地獄の有様をあらわす。一面八丈の浄玻璃の鏡となって。罪の軽重罪人の呵責。打つや鉄杖のかずかずことごとく見えたり。さてこそ鬼神に横道を正す。明鏡の宝なれ。すわや地獄に帰るぞとて。大地をかっぱと踏み鳴らし。大地をかっぱと。踏み破って。奈落の底にぞ。入りにける

遊行柳（ゆぎょうやなぎ）

【分類】三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：老柳の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

一遍上人の教えを全国に広めようとしている諸国遊行の僧が、上野国（千葉県）から奥州へと旅します。白河の関を越えて、新道を行こうとすると老人が現れ、声をかけます。老人は、先代の遊行上人が通ったのは、その新道ではなく、古道と呼んでいる昔の道だといい、またそこには朽木の柳という名木があると教えます。そして、僧をそちらへ案内します。もう今はあまり人の通わなくなり、草の生い茂った古道をついて行くと、古塚の上に柳の老木があります。僧がこの柳のいわれを尋ねると、老人は昔、西行がこの地へ旅し、「道のべに 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ」という歌を詠んだことを教えます。そして、僧に求めて十遍の念仏を授かると、古塚に姿を消してしまいます。

<中入>

僧は通りかかった土地の者からも、朽木の柳のいわれを聞き、先程の老人の話をして、土地の者は驚いて、再度、奇特を見るように勧めます。その夜、古塚のそばで、僧が念仏を唱え、仮寝をしていると、柳の精が白髪の老翁姿で現れます。そして、夕刻、ここに案内した者だと明かし、草木の霊まで成仏することのできる念仏の功德をたたえます。さらに柳にちなむ和漢の故事をひき、楊柳観音や蹴鞠のこと、さらに「源氏物語」の柏木の恋の話へと次々と話題を広げてゆき、十遍の念仏への報謝の舞を心静かに舞って見せます。僧が夜明けの風に目覚めると、そこには朽木の柳が立っているだけした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

そのかみ洛陽や。清水寺のいにしえ。五色に見えし瀧波を。尋ねのぼりし水上に。金色の光さす。朽木の柳たちまちに。楊柳観音とあらわれ。今に絶えせぬ跡とめて。利生あらたなる。歩みを運ぶ霊地なり。されば都の花盛り。大宮人の御遊にも。蹴鞠の庭の面。四本の木蔭枝たれて。暮に数ある沓の音。柳桜をこきまぜて。錦をかざる諸人の。花やかなるや小簾の隙洩りくる風の匂いより。手飼の虎の引綱も。長き思いになら楢の葉の。その柏木の及びなき。恋路もよしなしや。これは老いたる柳色の。狩衣も風折も。風にただよう足もとの。弱きもよしや老木の柳。気力なうしてよわよわと。立ち舞うも夢人を。現と見るぞはかなき。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老翁（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

肥後国（熊本県）、阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州（兵庫県）高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ竹杷（熊手）と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、その理由を尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をする、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げにさまざまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。さて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいだき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声を楽しむさっさっの声を楽しむ。

箆（えびら）

【分類】二番目物（修羅物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：里人（直面）、後シテ：梶原源太の霊（面・冠形童子）

【あらすじ】（独吟〔クセ〕の部分…下線部）

九州から都見物を志す一人の旅の僧が、早春の頃、須磨の浦の生田川のほとりに着きます。ちょうどそこに、色あざやかに咲いている梅の木があるので、来合わせた男に問うと、箆の梅だと答えるので、どうしてそういう名がついたのかと尋ねます。その男は源平の合戦の時、源氏方の若武者梶原源太景季が折から咲き誇っていた梅の花を手折って、笠印の代わりに箆にさし、めざましい活躍をしたので、箆の梅の名が残ったとその由来を語ります。さらに一ノ谷の合戦の様子を詳しく物語るの、僧が不審がると、男は自分は景季の亡霊だと名乗って、たそがれ時の梅の木陰に消え失せます。

<中入>

土地の者から重ねて箆の梅の話聞いた僧は、奇特の思いに立ち去りかね、木陰で仮寝をしていると、夢に武者姿の影季が現れ、修羅道での苦患を見せ、また往昔の合戦でのめざましい戦ぶりを見せたかと思うと、夜明けと共に回向を頼んで消え失せます。

【詞章】（独吟〔クセ〕の部分の抜粋）

時しも二月。上旬の空のことなれば。須磨の若木の桜もまだ咲かぬるうす雪の。さえかえる波ここもとに。生田のおのずから盛りを得て。勝つ色見する梅が枝。一花ひらけては天下の春よと。いくさの門出を。祝う心の花も。咲きかけぬ。さるほどに味方の勢。六万余騎を二手にわけて。教頼義経の。大手からめ手の。海山かけて須磨の浦。四方を囲みて押し寄する。魚鱗鶴翼もかくばかり。うしろの山松に群れているは。のこりの雪の白妙にねぐらをたたむ。真鶴の。翼をつらぬるその気色。雲にたぐえておびたたし。浦には海人さまさまの。漁父の舟影かず見えて。いさり焚火もかげろうや。嵐も波も須磨の浦。野にも山にも漕ぎ寄する。兵船はさながら。天の鳥舟もかくやらん。

弱法師（よろぼおし）

【分類】四番目物（現在物＝男物狂物）

【作者】観世十郎元雅

【主人公】シテ：俊徳丸（面・弱法師）

【あらすじ】（今回の独吟〔クルイ〕の部分…下線部）

河内国（大阪府）高安の里の左衛門尉通俊（みちとし）は、さる人の讒言を信じ、その子俊徳丸を追放します。しかし、すぐにそれが偽りであることがわかって、不憫に思い、彼の二世安楽を祈って天王寺で施行を行います。一方、俊徳丸は悲しみのあまり盲目となり、今は弱法師と呼ばれる乞食となっています。彼は杖を頼りに天王寺にやって来て、施行を受けます。折りしも今日は、春の彼岸の中日にあたり、弱法師の袖に梅の花が散りかかります。彼は、仏の慈悲をたたえ、仏法最初の天王寺建立の縁起を物語ります。その姿を見ると、まさしく我が子ですが、通俊は人目をはばかって、夜になって名乗ることにします。そして日想観を拝むようにと勧めます。天王寺の西門は、極楽の東門に向かっているのです。弱法師は入り日を拝み、かつては見慣れていた難波の美しい風景を心に思い浮かべ、心眼に映える光景に恍惚となり、興奮のあまり狂いますが、往来の人に行き当たり、狂いから覚めます。物を見るのは心で見るとから不自由はないと達観しても、やはり現実の生活はみじめなものです。やがて夜も更け、人影もとだえたので、父は名乗り出ます。親と知った俊徳丸は我が身を恥じて逃げようとするのですが、父はその手を取り、連れ立って高安の里に帰ります。

【詞章】（今回の独吟〔クルイ〕の部分の抜粋）

あら面白やわれ盲目とならざりしききは。弱法師が常は見馴れし境界なれば。なに疑いも難波江に。江月照し松風吹く。永夜の鐘声なにのなすところぞや。住吉の。松の木間より。眺むれば。月落ちかかる。淡路島山と。眺めしは月影の。詠めしは月影の。今は入り日や落ちかかるらん。日想観なれば曇りも波の。淡路絵島。須磨明石。紀の海までも。見えたり見えたり。満目青山は。心にあり。おう。見るぞとよ見るぞとよ。さて難波の海の。致景のかずかず。南はさこそと夕波の。住吉の松原。東の方は時を得て。春の緑の草香山。北はいづく。難波なる。長柄の橋のいたずらに。かなた。こなたとありくほどに。盲目の悲しきは。貴賤の人に行きあいの。まろび漂い難波江に。足もとはよろよろと。げにも真の。弱法師とて。人は笑い給うぞや。思えば恥かしや。今は狂い候わじ。今よりはさらに。狂わじ。

杜若（かきつばた）

【分類】三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊イロエ／序ノ舞

【作者】金春禅竹

【主人公】シテ：里の女＝杜若の精の化身（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

旅僧が都から東国へと赴き、三河国（愛知県）にやって来ます。そこは杜若の花が今を盛りと咲き誇っているのので、僧が花に見とれていると、一人の里の女がやって来ます。そして、ここは八橋という古歌にも詠まれた杜若の名所だと教え、在原業平が「かきつばた」の五文字を各句の頭において、「唐衣 着つつ 馴れにし 妻しあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ」と詠んだ事を語り、杜若は業平の形見の花だと偲びます。その上、僧を自分の庵に案内します。やがて、初冠と唐衣を着て現れるので、僧が驚いて尋ねると自分は杜若の精であると明かします。そして、伊勢物語に描かれた業平の数々の物語や、業平が歌舞菩薩の生まれ変わりである事などを語り、舞をまい、草木も成仏できることを喜びつつ消えて行きます。

【詞章】（今回の仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

植えおきし。昔の宿の。かきつばた。色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ昔なりけれ。色ばかりこそ。昔男の名をとめし。花橘の。匂いうつる。あやめの鬘の。色はいづれぞ。似たりや似たり。かきつばた花あやめ。梢に鳴くは。蝉の唐衣の。袖白妙の卵の花の雪の。夜もしらしらと。明くるしののめの。あさ紫の。杜若の。花も悟りの。心ひらけて。すわや今こそ草木国土。すはや今こそ。草木国土。悉皆成仏のみ法を得てこそ。帰りけれ。

鉄輪（かなわ）

【分類】四・五番目物（怨霊物）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：都の女（面・泥眼）、後シテ：鬼女（面・生成）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

都に住む一人の女が、自分を捨てて新しく妻を迎えた夫の不実を恨んで、洛北・貴船の社に日参し、祈願をかけています。

今日も社前に進むと、待ち構えていた社人が、「頭に鉄輪をいただき、その三本の足に火を灯し、顔に丹を塗り、赤い着物を着て、怒る心を持てば、たちまち鬼になって願いがかなう」という神託のあったことを告げます。

女は人違いだと言いますが、そう言う間にも顔色が変わり、つれない人に思い知らそうと走り去ります。

<中入>

一方、下京の男は、悪い夢見が続くので、陰陽師の清明のもとを訪れ、事情を述べて占ってもらおうと、女の恨みで今夜にも命が尽きると言われ、急いで祈禱を頼みます。

清明は、祭壇を調べ、男と新しい妻の人形を作って置き、祈り始めます。

すると、悪鬼となった女の霊が現れ、夫の心変わりを責め、後妻の髪をつかんで激しく打ちすえますが、守護する神々に追っ立てられ、神通力を失って、心を残しながらも退散します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

悪しかれと思わぬ山の。峰にだに。思わぬ山の峰にだに。人の嘆きは生うなるに。いわんや年月。思いに沈む怨みの数。つもって執心の。鬼となるもことわりや。いでいで命を取らん。いでいで命を取らんと。しもつを振り上げうわなりの。髪を手にから巻いて。打つや宇都の山の。夢うつつとも分かざる浮き世に。因果はめぐりあいたり。今さらさこそ。悔しかるらめ。さて懲りよ思い知れ。ことさら怨めしき。ことさら怨めしき。あだし男を取って行かんと。臥したる枕に立ち寄り見れば。恐ろしやみてぐらに。三十番神ましまして。魍魎鬼神はけがらわしや。出でよ出でよと責めたもうぞや。腹立ちや思う夫をば。取らであまさえ神々の。責めを蒙る悪鬼の神通通力自在の勢い絶えて。力もたよたよと。足弱車のめぐり逢うべき。時節を待つべしや。まずこの度は帰るべしと。いう声ばかりはさだかに聞こえ。いう声ばかり。聞こえて姿は。目に見えぬ鬼とぞ。なりにける。

鵜飼（うかい）

【分類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癒見）

【あらすじ】（『鵜ノ段』の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄ります。僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと語り、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華経の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華経の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華経のありがたさをたたえます。

【詞章】（『鵜ノ段』の部分の抜粋）

湿る松明振り立てて。藤の衣の玉襷。鵜籠を開き取り出し。鳥つ巢おろし荒鵜ども。この川波に。ぱっと。放せば。おもしろの有様や。おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追い回し。潜きあげ掬いあげ。隙なく魚を食う時は。罪も報いも後の世も。忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば。生け簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さ走るせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思い出でたり。月になりぬる悲しさよ。鵜舟のかがり影消えて。閻路に迷うこの身の。名残をしさを如何にせん。名残をしさを。如何にせん。

藤戸（ふじと）

【分類】四番目物（執心男物）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：漁師の母（面・曲見）、後シテ：漁師の亡霊（面・瘦男）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

源平合戦の時、備前国（岡山県）藤戸の合戦で、先陣の功のあった佐々木盛綱は、恩賞によりその辺りの土地を賜わり、新領主としてお国入りします。そして、まず領民の声を聞くべく、訴えのある者は申し出るように、従者に触れさせます。すると、一人の老婆がやって来て、罪もない我が子が、盛綱に殺された恨みを述べます。盛綱は一度は否定しますが、老婆の激しい追及と嘆きに、隠し切れず、去年3月の藤戸の合戦の折、手柄を立てようと、土地の漁師に浅瀬を聞き出しますが、他の者にも同じように教えられることを恐れて、その男を殺したことを告白します。そして、その時の様子を語り、その男を沈めた場所を話します。老婆は悲しみを新たにし、親子の情を述べ、自分も殺してほしいと詰め寄ります。盛綱は前非を悔いて、老婆を慰め、下人に命じて自宅まで送らせます。

<中入>

盛綱は早速に漁師を弔うべく、法要を行うことや一七日の間殺生禁断の由を指示し、自らも読経します。すると漁師の亡霊が現れ、盛綱は恩賞を賜わり、そのもととなった自分は殺された理不尽を責め、身の不運を嘆きます。そして、殺された時の有様を再現して見せ、悪龍となって恨みを晴らそうと思ったが、意外にも回向を受けたので成仏の身になったと告げ、消え去ります。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

おん喜びも我故なれば。いかなる恩をも。給ぶべきに。思いのほかに一命を。召されし事は馬にて。海を渡すよりは。これぞ稀代の例なる。さるにても忘れがたや。あれなる。浮き洲の岩の上に。我を連れて行く波の。氷のごとくなる。刀を抜いて。胸のあたりを。刺し通し刺し通さるれば肝魂も、きえきえとなる所を。そのまま海に。押し入れられて。千尋の底に。沈みしに。おりふし引く汐に。おりふし引く汐に。引かれて行く波の。浮きぬ沈みぬ埋れ木の。岩の。はざまに。流れかかって。藤戸の水底の。悪竜の水神となって恨み為さんと思いに。思わざるに御弔らいの。御法のみ舟に乗りをえて。すなわち弘誓の舟に浮かめば。水馴竿。さし引きて行く程に。生死の海を渡り。願いのごとくにやすやすと。彼の岸に。至り至りて。彼の岸に。至り至りて。成仏得脱の身となりぬ。成仏の身とぞ。なりにける。

乱（みだれ）

※『猩々』の小書「乱」は、題名を『乱』としています。

【分類】五番目物（切能＝祝言物） *乱

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】

ワキ「これは唐土かね金山の麓。揚子の里に住居する高風と申す民にて候。われ親に孝ある故により。夢中に告げて曰く。これより揚子の市に出で。世渡る業をなすべしと。教えのままになす業の。事去り時來りけるにや。次第次第に富貴の身と罷り成りて候。また酒を作りて売り候所に。いづくとも知らぬ者來たり。某が酒を買い飲み候が。数盃めぐれども面色変わらず。とこしなえに候ほどに。名を尋ねて候えば。海中に住む猩々と名乗り。壺をいだきて海中に入りて候ほどに。今日は名酒の数を尽くし。かの猩々を待たばやと存じ候。潯陽の江の。ほとりにて。潯陽の江のほとりにて。菊をたたえて夜もすがら。月の前にも友待つや。また傾むくる盃の。影をたたえて待ち居たり。影をたたえて。待ち居たり。

地謡「おいせぬや。おいせぬや。薬の名をも菊の水。盃も浮み出でて。友に逢うぞ嬉しき。また友に逢うぞ嬉しき。

シテ「御酒と聞く。

地謡「御酒と聞く。名もことわりや。秋風の。

シテ「吹けども吹けども。

地謡「さらに身には。寒むからじ。

シテ「ことわりや白菊の。

地謡「理や白菊の。着せ綿を温めて。酒をいざや汲もうよ。

シテ「まれ人もご覧ずらん。

地謡「月星は隈もなし。

シテ「所は潯陽の。

地謡「江の内の酒盛。

シテ「猩々舞を舞おうよ。

地謡「芦の葉の笛を吹き。波の鼓。どうと打ち。

シテ「声澄み渡る浦風の。

地謡「秋の調べや残るらん。

<乱>

シテ「有難や。御身心すなおなるにより。この壺に泉をたたえ。ただ今返えし。
授くるなり。よも尽きじ。

地謡「よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変わらぬ秋の夜の盃。影も傾むく入江にかれ立つ。足もとはよろよろと。酔に伏したる枕の夢の。醒むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変わらぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

融（とおる）

【分類】五番目物（切能＝貴人物） ＊早舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

忘れて年を経しものを。まった古に帰る波の。満つ塩竈の名にしおう。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わの遠き世に。その名を残す大臣。融の大臣とは。わが事なり。われ塩竈に心をうつし。あの籬が島の松蔭に。名月に舟を浮かめ。月宮殿の白衣の袖も。三五夜中の新月の色。千重ふるや。雪をめぐらす雲の袖。さすや桂の枝枝に。光を花と。散らす粧い。ここにも名に立つ白河の波の。あら面白や曲水の杯。うけたりうけたり。遊舞のそで。

<早舞>

あら面白の遊楽や。あら面白の遊楽や。そも名月のその中に。まだ初月の宵々に。影も姿も少なきはいかなる謂なるらん。それは西岫に。入り日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。黛の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くとも飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月もはや。影かたむきて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残惜しの面影や。名残惜しの。面影。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のを効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方〔はやかた〕…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管): 竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓: 左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓: 左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡〔すうたい〕

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟〔どくぎん〕

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟〔れんぎん〕

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞〔しまい〕

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡だけをバックにして舞います。仕舞扇を用いますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いません。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものなどもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子〔まいばやし〕

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子をバックにして装束や面をつけずに舞うもののことです。平均して10~20分程度の長さになり、長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

★部分の名称

段物〔だんもの〕

能の一曲中の聞かせ所・見せ所とされる部分で、クセやクルイなどの類型的形式に属さないものものを『〇〇の段』と呼んでいます。構造も特殊で、内容も濃く、型も派手なものが多いので、独吟や仕舞、一調を演奏する部分となっています。

「葵上」の『枕の段』、「海人」の『玉の段』、「小督」の『駒の段』などが有名です。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。
働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページ
(<http://www.syuneikai.net>) にも掲載しています。